

# フランスの精神分析

ラカン派を中心に

松本卓也

*Takuya Matsumoto*

[京都大学大学院人間・環境学研究科]

## Lacanが精神分析家となるまで

フランスの精神分析について限られた紙幅のなかで語るためには、Jacques Lacanの生涯および理論と実践を中心とすることが望ましい。Lacanは、1901年4月13日にパリに生まれ、パリ大学医学部を卒業した後、Henri ClaudeやGaëtan Gatian de Clérambaultに師事し、32年には独仏伊のパラノイア研究にFreudの知見を導入する博士論文『人格との関係からみたパラノイア性精神病』を提出している。

Lacanと精神分析との本格的な関わりは、1932年6月からRudolph Loewensteinによる教育分析を開始した時に始まる。なお、Loewensteinは、LacanがHartmannやKrisと並べて揶揄する自我心理学派の分析家でもあるが、この分析によってLacanは国際精神分析協会（International Psychoanalytical Association : IPA）傘下のパリ精神分析協会（Société psychanalytique de Paris : SPP）から認定され、1938年に分析家として開業した。この間の36年には、子どもが鏡という外部に映る自己のイメージに同一化することで身体の寸断化が克服されたとする「鏡像段階」論が発表がされ、その内容は1949年に論文化されている。

## 「セミナー」開講と〈父の名〉の理論の形成

1951年から、Freudのテキスト読解を主とする講義（「セミナー」）が開始される。1953年には、当時Lacanが行っていた変動時間セッション（分析の面接時間を毎回変化させる「短時間セッション」）がSacha Nachtらを中心とするSPPのメ

ンバーから問題視され、その結果としてLacanは同協会から離れ、やはり分析家の養成をめぐる問題でSPPから離反したDaniel Lagacheらが設立していたフランス精神分析協会（Société française de psychanalyse : SFP）に合流する。こうした経緯から、当時のLacanの論文には自我心理学やSPPの分析家への非難が溢れることになり、状況を知らない者には読みにくい論文が多数生まれることになった（主著『エクリ』の読みづらさの一部はここに由来する）。同年からセミナーはサンタンヌ病院に場所を移し、SFPの若手や精神分析に興味をもつ研修医の教育の一画として機能した。

この時期のLacanが強調していたのは、神経症と精神病の鑑別診断である。当時、精神病を心理療法で治癒させたという報告が流行したが、Lacanは、それらは真の精神病を扱っているのではないと考え、言語の障害の有無に基づく鑑別診断の重要性を指摘した。また、この時期のLacanはHeideggerの哲学に惚れ込み、自らが死に向かう存在であることを先駆的に覚悟した現存在が共同体の遺産を伝承するのと同様に、被分析者が〈父の名〉との関係のなかで歴史を引き受けることを重視した。さらにLévi-Straussの影響を受けながら、分析理論は構造主義的に改版された。

Lacanはその後もSFPの中心的なメンバーであったが、その一方でSFPはIPAへの復帰の交渉を続けていた。1963年には再びLacanの独自性が問題視され、SFPはIPAへの復帰を認められるかわりにLacanを除名した（Lacanはこの事件を「破門」と表現した）。その結果、1963年度のセミナー「〈複数形の父の名〉への序論」は初回で中止さ

れる。このセミナーは先述の〈父の名〉の地位を単一の普遍的なものから複数的なものへと再考しようとするものであり、ここにLacanの理論の転回の端緒がみられる。

### パリ・フロイト学派の形成と理論の転回

Lacanは、翌1964年6月にパリ・フロイト派(École freudienne de Paris : EFP)を立ち上げ、哲学者Althusserの協力でセミナーは高等師範学校に場所を移される。それに伴い、セミナーはフロイト解釈に基づいたLacan独自の理論を伝達するものへと徐々に変化していった(『精神分析の四基本概念』など)。こうして新しい理解者を獲得した彼は、当時の構造主義の潮流に乗り、哲学や思想の領域でも広く受容されはじめる。1966年には主要論文を集めた『エクリ』が刊行され話題を集めた。1967年には「パス」と呼ばれる独自の資格制度を制定し、1968年にはパリ第8大学に精神分析学部が設置され、制度的にも地盤を固めたが、「5月革命」の余波から翌1969年度からのセミナーはパンテオンの法学部で行われるようになった。

70年代のLacanは、次第に神経症と精神病の鑑別診断という論点を維持せず、両者の症状に共通する享楽の部分にアプローチする方向を深化させるようになった。現代のラカン派で「サントームの臨床」と呼ばれるのは、そのような前提にもとづき、症状がもつ無意識的な意味の探求ではなく、症状がどのように使用され、それをどう変化させるかを身体の水準に求める臨床である。なお、晩年のLacanはトポロジーに熱中するが行き詰まり、1980年1月15日に学派を解散する。その後、学派の主導権争いが勃発するが、翌1981年1月19日にはJacques-Alain Millerと彼の支持者たちによって「フロイトの大義派(Ecole de la Cause freudienne)」が創設される。Lacanはそれを見届けた後、9月9日に大腸がんのためパリに没した。

### 現代ラカン派の動向

1963年に起こったLacanの「破門」は、当時

Althusserの弟子であったMillerとLacanを会わせた。Millerは、後にLacanの娘婿かつ法定相続人にもなるが、彼はAlthusserの勧めでセミナーに参加した際に才能を見出され、次第にLacanの側近となった。以後も彼は、60年代後半に「分析手帖(Cahier pour l'analyse)」グループでの活動によって精神分析を理論的に深化させ、Lacanの死後は学派の中心となった。また、彼の提言によって分析の対象は神経症のみならず精神病にも広がり、精神分析における解釈も意味を明らかにする解釈ではなく、むしろ意味を削減していく「逆方向の解釈」によって身体の出来事に接近する技法として再定式化された。さらに彼は、1992年には世界精神分析協会(Association Mondiale de Psychanalyse : AMP)を設立し、世界各国のラカン派の連帯を組織している。最近では児童を扱う施設での実践によって、ラカン派の対象は自閉症にも広がっている。

なお、フランス国内では彼らとは異なる立場をとるラカン派団体も各種存在する。Millerの分析を担当し、2000年代までLacanの著作の出版権をめぐってMillerと法廷闘争を行ったCharles Melmanは、国際ラカン協会(Association lacanienne internationale : ALI)を組織しているほか、フランスの精神分析は数多くのグループに分裂している。

### 文献

Lacan J (1966) Écrits. Paris : Seuil.

Lacan J (1973) Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse. In : J-A Miller (Ed.) (1964) Le séminaire livre XI. Paris : Seuil. (小出浩之、鈴木國文、新宮一成、小川豊昭 訳 (2000) 精神分析の四基本概念. 岩波書店)

Lacan J (1975) De la psychose paranoïaque dans ses rapports avec la personnalité. Paris : Seuil. (宮本忠雄、関忠盛 訳 (1987) 人格との関係からみたパラノイア性精神病. 朝日出版社)

Lacan J (2001) Autres Écrits. Paris : Seuil.

松本卓也 (2015) 人はみな妄想する——ジャック・ラカンと鑑別診断の思想. 青土社.